

最優秀作品賞

「今を未来に」

浅川 立美さん

朝から蝉がジュージーと鳴き、特別暑かったあの日。我が家では盆を送り、いよいよ9月には、待ちに待った初孫の誕生。里帰り出産の娘を交え、連日生まれてくる孫の話でもちきり。ワクワクドキドキ期待と不安で落ち着かない日々。今日は6月に受けた主人の健診結果を私が聞きに行く事になっていた。私自身も受けたのだが、何の通知もなかったのも、自分なりに異常なしと思っていたが、突然保健師さんから「奥様も乳がんの再検査を大きな病院で受けて下さい。」と言われ、「ええ、まさか私が。」と予期していなかっただけに、ただ驚くだけだった。異常ありの通知が来ていないのにと少し腹立たしさを感じた。

実は6月の健診日にこんな事があった。健診の順番を待っていたのだが、健診を受ける人が多くなかなか自分の番がまわってこなかった。次の予定が入っていた私は、検査をキャンセルして帰ろうとしたが、隣に座っていた人が「ここまで待ったのだからもう少し」と声をかけてくれた。今思えばあの一言が私の命を救ってくれた。そして誰よりも感謝しなければならないのは、出産を控えていた娘だった。

当時、職場の責任者だった私は、仕事を第一に考え、再検査はしないと決めていた。そんな私を娘は無理やり病院に連れて行き、自分の通っている婦人科に紹介状を出した。受付の方が院内にある乳腺外科を案内してくれた。それから乳がんの検査が始まり、検査結果が出るまでには、そう時間はかからなかった。今まで生きてきた中であれほど涙を流したことはなかった。

あの日も、残暑が厳しく道路のアスファルトは陽炎でゆれていた。医師は何のためらいもなく、カルテに目を落とし「悪性腫瘍。乳がんですね。」と無表情に私に告知した。癌イコール死…頭の中が真っ白になった。「何で！ どうして体の調子は悪くないのに。」車に乗ると、汗だか涙だか区別のつかないも

のがドッと出てきた。職場にも寄らず家に帰った。家族もまさかの結果にビックリ。その夜、娘の陣痛が始まり、早朝に無事女の子を出産した。生まれたばかりの初孫は、泣いたり、あくびをしたり、もう一人前の顔をしている。この孫の誕生が、私に勇気と生きる力、命の尊さ、素晴らしさ、喜びを教えてくれた。

「この子と一緒に病気と闘い、新しい一步を踏み出そう。」

そう決めた私はセカンドオピニオンを希望し、病院を変えてみたが、結果は同じだった。覚悟を決め、仕事の段取りをして、涼風の吹き始めた9月末に手術日を迎えた。10日ほどで職場に復帰したが、私がそこに居ても居なくても何の変りはなかった。むしろ居なかった時の方が、一人一人責任を持ち仕事をこなしていたように感じた。前だけを見て自慢のように走ってきた自分の人生が恥ずかしかった。立ち止まって周りを見ると、今まで見えなかった物が見え、それがとても大切な事だと気づかされた。また手術が終われば治療は終わりかと思っていたら、それは大きな間違いだった。再発や転移予防の為、抗がん剤治療、放射線治療と長い道のりが待っていた。予想していなかった術後の治療、これが辛く苦しいがんと戦いだった。これから先どうなるのか不安の日々が続き、枕を濡らす夜も多かった。とにかく乳がんに関する情報がほしかった。そんな時、乳がん患者会を立ち上げる仲間に出会い、同じ悩みや苦しみを持つ仲間達と心を開いて話をする事が出来た。不思議な事に、ただ話をするだけだったが、不安が少しずつ和らぎ、笑顔がもどってきた。病気になって失った物も多かったが、得た物の方が多かったように思う。どんなに情報社会が進もうと、体験した人の話を聴くほど確実な情報はない。そして、心開いて話すほど楽になる薬はない。これは体験した人でないとわからない。同じ痛みを持つ仲間とこれからも一緒に歩いて行きたい。そんな思いで10年、今でも特別の理由がない限り、片道70分の道のりを運転し、患者会を休むことはない。

そして誰が何といっても命を救うのは「早期発見。」

私は機会あるごと、健診の大切さを自分の体験を通して伝えている。初めての健診で見つかった乳がんは、確かにショックだった。でも今思うとラッキーだったのは間違いない。健診の時、私の手を引いてくれた方の一言が、

こんなにも私の人生を左右することは予想できなかった。感謝、感謝の気持ちでいっぱい。そして、嬉しいことに、あれから次々に新しい命にめぐり会い、今では孫6人のおばあちゃん。「おばあちゃんに似ているね。」こんな言葉を聞くと改めて生きている喜びを感じる。

今年も満開に咲き誇る桜の下で、大きく息を吸い込み私はつぶやく。

今を未来に。